

特異点：都市

侯爵芋

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

新しく見つかった特異点が「Library Of Ruina」の舞台だった話。
作者はLORは「たった一つの本」の実績を解除済み、アートブックを購入済みです。
FateシリーズはFGOプレイヤーでアニメは見ているものと見ていないものがあるにわかです。

拙い文章ですが暇つぶしになれば幸いです。

目次

プログラグ

1

プロローグ

「藤丸立香、ただいま到着しました」

「先輩、おはようございます」

特異点が見つかったという知らせを聞き管制室に入室すると、マシユが挨拶で出迎えてくれる。

「おはようマシユ」

「よく来てくれた、藤丸君」

マシユの後ろからダ・ヴィンチちゃんが話しかけてくる。

「おはようダ・ヴィンチちゃん」

「うむ、元気そうで何よりだ」

「挨拶もいいが時間も有限だ。早く説明した方が良いのではないかね」

挨拶に答えるダ・ヴィンチちゃんに続いてホームズが急ぐように促す。心なしか普段よりも機嫌が悪いように見える。

「今回は随分と急かすじゃないか、せっかちな男はモテないぞ」

「もしかして焦ってる?」

「ふむ、確かにいつもと比べ異常なまでに情報が得られなかったが……、態度に出てしまっていたか」

「ホームズさんほどの名探偵でも今回の特異点については何も分からないのでしょうか」

まるで凶星であるかのように振る舞うホームズにマシュが特異点について質問する。

「その通りだよ、ミス・キリエライト。韓国の辺りに観測されたことと新宿のような都市が広がっているということ以外の一切の情報がなかった」

「付け加えると観測しようとしたら逆にこちら側に干渉されそうになり、直ぐに中止したことも原因だね。つまり瞬時に察知・反撃ができる存在がいるということが考えられる」

「万能の天才や名探偵と呼ばれるお二人でも観測できない特異点……、非常に危険な場所と推測します」

「マシュの言う通り、どんな危険があるかわからない。そこで今回のメンバーを紹介しよう」

ダ・ヴィンチちゃんや合図を送ると集められたサーヴァントが一斉に入ってくる。

「まずは主に戦闘面で活躍してもらおうスカサハ、クローリン、酒？童子の三名だ」

「よろしく頼む」

「まかせな、師匠もいるんだ、マスターは大船に乗ったつもりでない」

「うちも行くことになったけど……、退屈になったら好き勝手させてもろてもかまへんね？」

「酒？ 童子はいろんな意味で不安だけど、信頼できるメンバーだと思う。そんな感想を抱いていると部屋の外から茨木童子が飛び込んでくる。」

「酒？ は行くのに吾を呼ばぬのはどういう見だ！」

「茨木、あまり我儘ばかりゆうたらあかんよ」

「しかし——」

「それに茨木が留守番もできんなんて……うち、悲しいわあ」

「うぐっ」

「ごめんねばらきー、お詫びに帰ってきたらお菓子を上げるから」

「……分かった、酒？ に免じて許してやろう。だが、マスターのその言葉を忘れるでないぞー！」

不満げながらも引き下がる茨木童子を見て、ダ・ヴィンチちゃんとは本題に戻る。

「それじゃあ続けるよ、次は医療担当としてアスクレピオスとナイチンゲールの二人に行ってもらおう」

「衛生環境、健康の維持は任せてください」

「特異点……新たな医療技術や謎の病気があると思うと楽しくみだ」

平常運転のナイチンゲールの横で思ったよりもやる気のアスケレピオスが立っていた。

「うむ、やる気が十分なようで安心だ。そしてロビンフッドとエジソンの二人にはサポートに務めてもらいたい」

「はいよ。裏方ならお安い御用だ」

「いかなる場所であろうとも、この天才の偉大な発明を思い知らせてやろう！」

ロビンフッドの返事の後にエジソンが吼える。

「最後にマシユ、藤丸君の守りは任せたよ」

「了解です。このマシユ・キリエライト、先輩には傷一つつけさせません！」

「今回は不測の事態に備えるために人数が多くなってしまったから藤丸君には負担をかけてしまうけれどこちらもサポートをするから頑張つてほしい」

「はい！」

「——少し待ちなさい」

俺も意気込み、いざレイシフトしようとするところで声がかかる。振り返ると虞美人がアンデルセンとサリエリを連れて管制室に入ってきた。

「どうしたんだい？」

「項羽様に言われてきたの。何でもこの二人も連れていけだそうよ」

「全く迷惑な話だ、締切りに追われている作家を無理やり連れていくとは、少しは遠慮というものを覚えるべきではないか？」

「そんなの私には関係ないわよ、はつきり言つて項羽様以外はどうでもいいの。今回も項羽様に命じられたからやっただよ」

「チツ、面倒な女だ」

「まあ……そういうことだ。マスター、必要とあらば命令せよ。貴様が言えば、我はそのようにしよう」

「うん、その時はお願いするね」

項羽が言うのなら頼るべきなのだろう。そう思っている立香に虞美人話しかける。

「後輩、お前がいなくなるとせっかく会えた項羽様とまた離れ離れになってしまうのだから、どんな場所だろうと絶対に生きて帰りなさい」

「素直に激励も出来んのかこの女は」

「そこ、五月蠅い！」

「ありがとうございます、先輩」

再び口喧嘩を始めそうな二人に苦笑いしながらもお礼を言う。

「大丈夫です虞美人さん、私が先輩を守り切つて見せます」

「ええ、マシユも頑張りなさい」

「はい！」

マシユも激励されて張り切っている。

「それじゃあ皆、行つてきます！」

こうして俺はレイシフトをした。